ダイソー
ミニ辞典シリーズ 13

新 ことわざ事典

【即解・必携】

「出る杭は打たれる」
知って得する先人の
知恵一、〇〇〇余語

ことわざ・凡例

■見出し語

五十音順に約千語を収録しています。

■解説と記号

見出し語と解説に続けて、以下の注釈などを示しています。

【説】ことわざの背景、用語の解説、誤用に対する注意のほか、必要に応じてその他の情報を記載。

【出】主に中国出典の書名または人名。

【類】類似のことわざ、関連のあることわざ。

【反】反対の意味のことわざ。

【同】意味が同じで、言い方に違いのあることわざ。

【対】対の意味のことわざ。

※本文中では注釈を続けて表示する場合もあります。

※本書に記載の漢字は、JIS第一水準および第二水準に準拠しています。

五十音順早見表

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
173	168	162	150	128	112	87	63	34	3
	り		み	ひ	に	ち	し	き	い
	169		153	133	118	96	69	42	12
	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
	171	165	155	142	121	99	78	48	20
	れ		め	へ	ね	て	せ	け	え
	171		157	145	123	102	81	52	23
	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お
	172	166	159	148	126	106	85	56	25

あ

ああ言えばこう言う

人の言うことにすなおに従わず、なんだかんだと理屈をこねて言い返すこと。

【類】右と言えば左

匕首に鍔

釣り合わないものやふさわしくないもののたとえ。

【説】「匕首」は鍔のない短刀で、それに鍔をつけたのでは釣り合わないから。

挨拶は時の氏神

争い事の時、仲裁が入ったら意地や見栄を捨てて、仲裁に従ったほうがよいということ。

【説】「挨拶」は仲裁の意。争い事の仲裁人は、都合よく現れた氏神様のようなもので、またとない救いの神だという意味から。

開いた口には戸はたたぬ

噂はどうやっても防ぐことができないというたとえ。

【類】人の口に戸は立てられぬ

相手変われど主変わらず

なにかをするたびに相手は変わっているのに、相手をするこちら（主）は変わらずに、同じことを繰り返しているということ。

相手のない喧嘩はできぬ

一人で喧嘩はできない。喧嘩を売られても相手になるなという戒め。

【類】一人喧嘩はならぬ

会うは別れの始め

人と人とが出会えばいつか別れる時が来る。会うことは別れることの始まりでもあるということ。

【類】会者定離

阿吽の呼吸（あうんのこきゅう）

互いの微妙な気持ちや調子がぴたりと合うこと。

【説】「阿」は吐く息、「吽」は吸う息。

仰いで天に愧じず（あおいでてんにはじず）

やましい点がまったくなく、世間に対して恥ずべきことがないということ。

【説】天を仰ぎ見て、天に恥じることは何もないことから。

【出】孟子

青菜に塩（あおなにしお）

うちひしがれ、うなだれている様子。

【説】青い菜に塩をふると、しおれてしまうことから。

【類】蛞蝓（なめくじ）に塩

青は藍より出でて藍より青し（あおはあいよりいでてあいよりあおし）

弟子が師よりもぬきんでたり、教えた人よりも教えられた人のほうが優れてしまうたとえ。

【説】元来、青色は藍から染料を取ったが、その青がもとの藍より青くなることから。「出藍（しゅつらん）の誉れ」とも言う。【出】荀子

秋風が立つ（あきかぜがたつ）

男女間の愛情がさめるたとえ。

【説】「秋」に「飽き」をかけた言葉。

空樽は音が高い（あきだるはおとがたかい）

あさはかな人ほど知りもしないことをとくとくとしゃべることのたとえ。

【説】空の樽は、叩（たた）くと高い音を立てることから。

秋茄子嫁に食わすな（あきなすびよめにくわすな）

秋の茄子はおいしいので嫁に食べさせるのはもったいない、という説と、秋の茄子は体を冷やすといけないから、あるいは種が少ないので子種が少なくなるといけないから嫁に食べさせてはいけない、という二つの説がある。

秋の扇（あきおうぎ）

男に見捨てられた女のたとえ。

【説】夏には重宝に使われた扇も、秋になると見捨てられるという意味。中国・漢の成帝に寵愛された女性が、成帝に顧みられなくなったことを秋の扇にたとえて嘆きの詩を詠んだという故事から。

秋の鹿は笛に寄る（あきしかふえよる）

恋のために身を滅ぼすこと。また、弱みにつけ込まれて利用されることのたとえ。

【説】鹿の発情期である秋には、雌鹿の鳴き声に似た笛で雄鹿がおびき寄せられ、人間に捕らえられてしまうことから。

秋の日は釣瓶落し（あきひつるべおとし）

秋は日が沈むのが早い。急速に日が暮れていくことのたとえ。

【説】井戸の中へ釣瓶を落とすように、あっという間に日が沈むことから。

【対】春の日は暮れそうで暮れぬ

悪事、千里を行く（あくじせんりゆく）

悪い噂はあっという間に遠くまで伝わるということ。

【説】「好事門を出でず、悪事千里を行く」とも言う。良い評判はなかなか伝わらないが、悪い噂はすぐに広まるという意味。

【出】北夢瑣言（ほくむさげん）

悪女の深情け（あくじょふかなさけ）

器量のよくない女性ほど、愛情が強く、反面、嫉妬

心も激しいということ。

【説】本来「悪女」とは心の悪い女のことではなく、容姿の悪い女のことをいった。

悪銭、身に付かず

不正な手段で得た金は、つまらないことに使い、すぐになくなってしまうという意味。

悪に強ければ善にも強し

悪いことをする人は、強い力と心の持ち主なので、ひとたび心を入れ替えると生まれ変わったような善人になるということ。

浅い川も深く渡れ

浅い川でもどんな危険があるかわからないので、深い川を渡るように注意して渡れという意味。ささいなことに見えても、決して油断してはいけないということのたとえ。

朝顔の花一時

朝早く咲き、昼にはしぼむ朝顔の花のように、物事の盛りの時期は短く、はかないことのたとえ。

【同】槿花一日（きんかいちじつ）の栄

薊の花も一盛り

若い頃は魅力の乏しい女性でも、年頃になれば美しく変わる時があるということのたとえ。

【説】華やかさに乏しい薊の花にも、相応に美しい時期があることから。

【類】鬼も十八番茶も出花

朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり

朝に正しい人の道理を聞き、それを理解できたとしたなら、その日の夕方に死んだとしても悔いはないという意味。真理・道徳の尊さを説いた言葉。

【出】論語

朝に夕べを謀らず（あしたゆうべをはからず）

忙しい朝に、その日の夕方のことなど考えるゆとりがないという意味から、差し迫っている状況で、先のことを考える余裕のないことのたとえ。

【出】春秋左氏伝【類】朝（あした）に夕べを慮（おもんぱか）らず

足下から鳥が立つ（あしもとからとりがたつ）

身近なところで意外なことが起こったり、また、思いついたようにあわてて物事を始めたりすることのたとえ。

【類】寝耳に水

足下を見る（あしもとをみる）

相手の弱点を見越してつけ込んだり、自分の利益を図ること。

【説】駕籠舁（かごかき）や馬方などが旅人の足下の疲れ具合を見て、弱みにつけ込んで法外な値段を要求したことから。

明日ありと思う心の仇桜（あすありとおもうこころのあだざくら）

明日をあてにして、今日をおろそかにしていると、いつどんなことが起こって、好機を逸するかわからないということ。

【説】桜の花が今日咲いているからといって、明日もまだ咲いているだろうと思っていても、夜の間の風や嵐で翌朝には花が散ってしまうかもしれないということ。「夜半（よわ）に嵐の吹かぬものかは」と続く、親鸞（しんらん）作と伝えられる歌から。

明日の百より今日の五十（あすのひゃくよりきょうのごじゅう）

不確かでわからない明日のことをあてにするより、少しでも今日確実に手にできるもののほうがよいということ。

【類】末の百両より今の五十両

徒花に実は生らぬ

見栄えがよくても、中身が伴わなくては、成果は期待できないということ。

【説】「徒花」は咲くだけで実のならない花。

頭隠して尻隠さず

悪事や短所、欠点などの一部を隠しただけで、すべて隠しおおせたつもりでいること。

【説】雉子（きじ）が草むらに頭だけを突っ込んで、尾が出ているのに気づかない様子から。

頭の上の蝿も追えない

自分の頭にとまる蝿さえ追い払えないように、自分のことを自分で満足に解決できないこと。

新しい酒は新しい革袋に盛れ

新しい思想や表現は、それにふさわしい新しい方法、手法を用いるべきだということ。

【出】新約聖書・マタイ伝

中らずと雖も遠からず

完全に的中とはいえないが、あながち外れてもいない、おおむね的を射ているということ。

【説】「中らず」は「当たらず」とも書く。

【出】大学（だいがく）

当るも八卦、当らぬも八卦

占いに当たり、外れはつきもの。当たることもあれば外れることもあるので、あまり大げさに気にすることはないということ。

【説】「八卦」は易、占いのこと。

仇を恩で報ずる

ひどい仕打ちを受けてもその相手をうらまずに、あえてその人に温かい情けをかけること。

【反】恩を仇で返す

彼方立てれば此方が立たぬ

片方に都合のよいようにすれば、別の一方で都合が悪くなる、どちらも同時に満足させるのはむずかしいということ。

【説】この場合の「立てる」は顔を立てること。

【類】出船（でふね）によい風は入り船に悪い

あっても苦労、なくても苦労

お金は、あればあったで、使い道などにそれなりの苦労が絶えないし、また、なければないで苦労をするということ。お金だけでなく、子供のあるなしにもたとえられる。

羹に懲りて膾を吹く

一度の失敗に懲りて、次から必要のない心配や用心をすること。

【説】「羹」は熱いお吸い物。「膾」は酢で和えた冷たい料理。熱い吸い物でやけどしたのに懲りて、冷たい膾まで吹いて冷ますという意味。

【出】楚辞【類】蛇に噛まれて朽ち縄に怖（お）ず

後の雁が先になる

学問や仕事などで、後からきた人、遅れをとっていた人が先の人を追い越してしまうこと。また、若い人が年長の人より先に死んだ場合にも使う。

【説】列をなして飛ぶ雁の群れが、入れ代わりながら飛ぶ様子から。

後は野となれ山となれ

とりあえず、自分としてのやるべきことをやったならば、あとは運任せ、人任せでなるようになれ、ということ。

姉女房は身代の薬

姉さん女房のほうが、どちらかといえば家計の切り盛りがうまく、夫に尽くし、仲良く暮らしていけるので、円満な所帯になるということ。

【説】「身代」は財産。良い奥さんは、財産、薬のようなものだという意味。

あの声で蜥蜴食らうか時鳥（こえ とかげ く ほととぎす）

人の性格や物事は、見かけでは判断できないこと。外見と中身が異なって驚かされることのたとえ。

【説】「美しい声で鳴くあのほととぎすが、意外なことに、とかげを食べているのか…」と詠んだ、江戸時代の俳人・宝井其角（たからいきかく）の句から。

危ない橋も一度は渡れ（あぶ はし いちど わた）

安全を考えてばかりで、物事を慎重に運びすぎていては、成功することはできない。時には失敗も覚悟でやってみることも必要だということ。

虻蜂捕らず（あぶはちと）

欲張って二つのものを得ようとして、結局、両方とも手に入らないこと。

【説】蜘蛛が巣に掛かった虻と蜂を両方同時に捕らえようとして、結局どちらにも逃げられてしまう様子から。

【類】二兎を追う者は一兎をも得ず／花も折らず実も取らず【反】一挙両得／一石二鳥

雨垂れ石を穿つ（あまだ いし うが）

小さな雨垂れでも、長い年月、同じところに落ち続ければ石に穴をあけてしまうように、小さな努力でも根気よく、辛抱強く続けていればいつかは必ず成功するということ。「点滴石を穿つ」とも言う。

【出】漢書

雨夜の月（あまよ つき）

存在を想像するだけで、現実には見ることのできな

いもの。また、想像するだけで実現しないことのたとえ。

【説】雨夜の月はどこかに出ていることは想像できても、目には見えないことから。

【類】雨夜の星

雨降って地固まる

雨が降ったあとに、カラッと晴れて地面が堅く固まるように、いやなことやもめごとが起きた場合でも、時間がたって落ち着いてみれば、それがよい結果に変わっていることもあるということ。

危うきこと累卵の如し

いつ壊れてもおかしくない状態、常に危険と隣り合わせでいる状態のこと。

【説】「累卵」は積み重ねた卵。いつ崩れても不思議ではないという意味。「累卵の危うき」とも言う。

【出】史記

過ちては改むるに憚ることなかれ

間違いを犯したと気づいた時は、躊躇せず、すみやかに改めなければならないということ。また、過ちに気づいていながらそれを改めないことこそ、過ちだということ。

【出】論語

嵐の前の静けさ

暴風雨の前には一時、静かな状態があるように、大きな事件などが起こりそうな気配の前に不気味なほど静かなこと。

合わせ物は離れ物

別々のものを合わせて作ったものは、もとの形にもどる場合があるということ。夫婦の別離などについて言う。

合わぬ蓋あれば合う蓋あり

人でも物でも、うまく合う場合もあれば合わない場合もある。それぞれにふさわしい組み合わせがあるということ。主に男女の間柄について使われる。

【類】破（わ）れ鍋（なべ）に綴（と）じ蓋（ぶた）

案ずるより産むが易い

あれこれと心配していても、実際は、意外にたやすく、心配するほどでもないということのたとえ。

【説】出産前にいろいろと心配していても、結果的に心配するほどのこともなく、取り越し苦労で終わる場合が多いことから。

暗夜に灯火を失う

暗闇で光を失うように、頼りにしていたもの、人を失って、途方にくれること。

い

言うは易く行うは難し

口で言うのは簡単だが、それを実際行動にうつすのはむずかしいということ。

【出】塩鉄論

家貧しくして孝子顕る

裕福な家に生まれるとあまりその人物の存在は目立たないが、貧乏や苦境に立たされた時、その人物の真価が発揮され、認められるということ。

【出】宝鑑

生き馬の目を抜く

生きている馬の目さえ抜き取ってしまうほど、すばしっこく、ずる賢くて抜け目がないこと。

息の臭きは主知らず

自分の息のにおいに気がつかないように、自分の欠点も自分では気がつかないということ。

いざ鎌倉

緊急の一大事が起きた時。また、その場に急いで赴く様子。

【説】鎌倉時代、幕府に緊急事態が起これば、諸国の武士が「いざ鎌倉へ」と馳（は）せ参じたことから。

石が流れて木の葉が沈む

物事が逆であることのたとえ。

石に灸

石にお灸をするように、なんの効果もないこと。

石に漱ぎ、流れに枕す

無理のある自説、こじつけを通そうとすること。負け惜しみが強いこと。

【説】「石に枕し、流れに漱ぐ」と言うべき言葉を「石に漱ぎ、流れに枕す」と言い誤ってしまった中国・晋（しん）の孫楚（そんそ）という人物が、「石に漱ぐ」は歯を磨くため、「流れに枕す」は俗事を聞いた耳を洗うためだとこじつけた故事から。「流石（さすが）」という言葉もうまく言い逃れしたこの言葉から。夏目漱石のペンネームもここから。

【出】晋書

石に立つ矢

不可能に思えることでも、思いを込めて一心に物事に当たればそれが実現できるというたとえ。

【説】中国の武将が、虎と思い、一心に集中して矢を射たところ、虎に似た大石に矢が刺さったという故事から。

【出】史記【類】思う念力岩をも徹す

石の上にも三年

冷たい石に三年も座り続ければ温かくなる。苦労やつらいことがあっても忍耐と辛抱が大切だということ。

石橋を叩いて渡る

頑丈な石橋ですらも壊れないかと心配して叩きながら渡るように、用心の上にもさらに用心を重ねて慎重にやること。

【類】念には念を入れよ／浅い川も深く渡れ

医者の不養生

口では大層なことを言いながら、実行が伴わないことのたとえ。

【説】医者が患者に不摂生（ふせっせい）を意見しているのに、いざ自分のこととなると医者自身が不摂生をしていることが多いということ。

【類】紺屋（こうや）の白袴（しろばかま）

衣食足りて礼節を知る

生活に余裕がないと、礼儀作法もおろそかになるが、ゆとりができてくると、人は自然に礼儀正しく節度ある行動ができるようになるということ。

いずれ菖蒲か杜若

菖蒲と杜若のように、どちらもよく似ていて同じように美しく、甲乙をつけがたいことのたとえ。

居候、三杯目にはそっと出し

人の家のお世話になっている居候の立場では、食事の時でも遠慮して三杯目のおかわりはそっと出してしまうという川柳から。

急がば回れ

急いでいる時こそ落ち着いて、確実にやるほうが、結局は早く物事が片付くということ。

【説】急ぐ時は危険の多い近道よりも、遠回りでも安全な道を行くほうが、結局は早く目的地に着くという意味。

急ぎの文は静かに書け

急ぎの手紙ほど大事な用件が多いので、あせって早く書こうとすると、間違いが多くなるもの。急ぐ時ほど落ち着いて丁寧に書いたほうがよいということ。

磯の鮑の片思い

鮑は二枚貝の片方の貝殻だけのように見えることから、「片思い」にかけて言ったもの。

板子一枚下は地獄

昔の木造の船は、木の板一枚下は海。船乗りという仕事は、もし海に落ちたら死につながるきわめて危険な仕事だということ。

痛し痒し

掻（か）けば痛いし、掻かなければ痒い。どちらにしても善し悪しの判断のつきにくいこと。

頂く物は夏も小袖

役に立たない物でもいただける物はなんでも貰うという、きわめて欲の深いことのたとえ。

【説】「小袖」は絹の綿入れ。ただで貰えるのなら、暑い夏に不要の小袖も貰うという意味。

【類】貰う物は夏も小袖

鼬の道切り

人との付き合いなどが途絶えること。

【説】鼬は道を横切ると二度と同じ道を通らないといわれていることから、鼬が人の前を横切ると交際も行ったきりの一方通行になるということのたとえ。

痛む上に塩を塗る

悪いことの上にさらに悪いことが重なって起きるこ

とのたとえ。

【説】傷口が痛くてたまらないときに、その傷の上に塩を塗ればいっそう痛くなることから。

【類】泣き面に蜂／弱り目に祟（たた）り目

一押し、二金、三男

女性の心をとらえるには、まず一に押しの強さ、次にお金、男っぷりのよさはその次であるということ。

一事が万事

一つのことを見れば、そこからすべてのことがおおよそ推測できるということ。

【説】一般に、良いことのたとえに使うより、悪い一面を見て、すべてがその調子でだめだろうと思う場合に用いることが多い。

一度あることは二度ある

良いことでも悪いことでも一度起きたことは、また同じようなことが起こりがち。特に悪いことが起きた場合は、警戒したほうがよいという意味。

【類】二度あることは三度ある

一難去ってまた一難

一度難を逃れたと思っても、次々と困難や災難が襲ってくること。

【類】虎口（ここう）を逃れて竜穴に入る／前門の虎後門の狼

一に看病、二に薬

病気には薬の効き目も大きいが、行き届いた看病のほうがもっと効き目があるということ。

一日の計は朝にあり、一年の計は元旦にあり

その日の計画は朝のうちに、その年の計画は元旦に、

というように、計画を立てる場合はなるべく早めにすべきだということのたとえ。

一文惜しみの百知らず

その時必要なわずかなお金を惜しんだがために、あとで大きな損失を招くことに気がつかない愚かさをいう。目先の損得だけを考えて、将来の大きな利益を考えないこと。

一葉落ちて天下の秋を知る

物事のちょっとした前兆から、その後の大勢をいち早く察知すること。

【説】他の樹木より葉が大きく、早めに落葉する青桐（あおぎり）の葉が、一葉落ちるのを見て、秋の気配を知ることから。

一を聞いて十を知る

一つの事柄からすべてを理解するように、ものわかりが早く、聡明で応用がきくこと。

【出】論語

一将功成りて万骨枯る

華やかな功績をあげた人の陰には、たくさんの人たちの苦労や努力があるということのたとえ。

【説】一人の将軍の功名とひきかえに、犠牲となった大勢の兵士の骨が戦場にさらされているという意味。

【出】曹松

一寸先は闇

目の前が真っ暗闇で何も見えないように、これから先、何が起こるのか、まるで予測がつかないこと。

一寸の虫にも五分の魂

小さく弱い者にも、それ相応の考えや意地があるという意味。どんなに小さく見える相手でもあなどってはいけないということ。

一銭を笑う者は一銭に泣く

わずかなお金を粗末にする人は、そのわずかなお金に困る羽目になるという意味。お金は決して粗末に扱ってはならないという戒め。

一敗、地に塗れる

再起する気力も失うほど、徹底的に打ち負かされること。

【説】一度の戦いで完全に敗北し、内臓までもが踏みにじられ、泥まみれになるという意味。

【出】史記

一髪、千鈞を引く

明らかに無理と思えるような、きわめて危険なことをすること。

【説】一本の髪の毛で千鈞（約六・七キロ）の物を引っ張る意味。

【出】韓愈（かんゆ）

いつまでもあると思うな親と金

親は子供より早く死に、お金も使えばいつかなくなる。だから人に頼らず、独立心と倹約を心がけなければ必ず困る時がくるという戒め。

いつも月夜に米の飯

夜がいつでも明るい月夜であり、毎日あたりまえのようにご飯が食べられればありがたいことだが、実際はなかなかそうはいかないということ。

犬も歩けば棒に当たる

犬もあちこちうろつくから、人の振り回す棒に当たって叩（たた）かれる羽目になる。本来は、なまじでしゃばるとろくなことがないという意味。反対に、なにもせずにじっとしているより、行動することで、思いがけない幸運に巡り合うかもしれないという使

われ方もする。

命あっての物種

何事も命があるからできる、生きているからこそ希望が持てるのであって、死んでしまってはなんの意味もない。命にかかわるような危険なことはなるべく避けるべきということ。

【説】「物種」はものごとの根源の意。

命長ければ恥多し

普通に長生きさえしていれば、やはり生きた分だけそれなりに恥をかくことも多くなるということ。

【出】荘子

井の中の蛙大海を知らず

小さな井戸の中の蛙には、大きな海を知る由もない。自分の狭い知識や了見にとらわれて、それより遥かに広い世界を知らない人を嘲笑する言葉。

「井底（せいてい）の蛙（あ）」「井蛙（せいあ）」とも言う。

色男、金と力はなかりけり

美男、色男といわれる男は、すべてを兼ね備えているわけではなく、財力、腕力などがないものだという川柳から。

色気より食い気

異性に対する関心より食欲のほうが優先するということ。見栄や外見より実利を重視する場合にも使う。

【類】花より団子

鰯で精進落ち

せっかくの努力が小さなことで、無駄になったりするたとえ。また長い努力の割に結果が小さくてがっかりすること。

【説】「精進落ち」は長期間菜食で身を慎む精進期間が終

わってから、魚肉類を食べること。せっかくの精進落ちが鰯では、今までの苦労や努力が報われないと嘆くことから。

鰯の頭も信心から

鰯の頭のように、一般の人には値打ちのないと思うものでも、信仰心がある人にとっては、尊くありがたいものになるということ。

【説】節分に鰯の頭を柊（ひいらぎ）の枝にさし、門口に置くと悪鬼を追い払うという風習からきた言葉。

言わぬが花

言葉に出して、はっきり言ってしまうより、黙っているほうがかえって趣や値打ちがあるということ。

有為転変は世の習い

世の中のありさま、物事は、移り変わりが激しく、少しの間も止まることがないということ。

魚心あれば水心

こちらが好意を示せば、相手も好意をもって接するようになるということ。また、相手の出方次第で、こちらもそれに応ずる用意があること。

有卦に入る

幸運が続き、すべてがうまくいくこと。

【説】「有卦」は陰陽道の言葉。有卦に入ると良いことが七年間続くということから。

烏合の衆

カラスの集まりのように、寄り集まっただけの規律も統制もとれていない群集のこと。

【出】後漢書

雨後の筍（うごのたけのこ）

雨の後、たけのこが続々と生えてくるように、次々と現れたり、続いて起こったりすることのたとえ。

牛に引かれて善光寺参り（うしにひかれてぜんこうじまい）

人に連れられるまま出かけていくこと。また、自分の意思からではなく他からの誘いで、良い方向へ導かれることのたとえ。

【説】昔、善光寺（長野県）の近くに住んでいた老女が、さらしておいた布を隣家の牛が角にひっかけて走っていくのを追いかけているうちに、善光寺に駆け込み、それが縁で信心することになったという説話から。

牛の角を蜂が刺す（うしのつのをはちがさす）

なんとも感じないことのたとえ。

【説】牛の角を蜂が刺したところで、痛くもかゆくもないことから。

【類】鹿の角を蜂が刺す

氏より育ち（うじよりそだち）

家柄や血筋より、育った境遇や教育のほうが大切だということ。

牛を馬に乗り換える（うしをうまにのりかえる）

足の遅い牛から、足の速い馬に乗り換えるように、劣っているものから、優れたものへと選択肢をかえること。

嘘から出た実（うそからでたまこと）

嘘や冗談が、本当になってしまうこと。

【類】瓢箪（ひょうたん）から駒が出る

嘘も方便（うそもほうべん）

嘘も時と場合によっては、物事を円満に運ぶための

手段として必要になる場合があるということ。

【説】「方便」は目的を遂げるための便宜的な手段のこと。

うだつが上がらぬ

なかなか逆境から抜け出せなくて、いつまでたっても成功や出世のできない様子。

【説】「うだつ」は梁の上に立てて、棟（むな）木を支える短い柱。梁だけでうだつも上げられないような粗末な家にしか住めないという意味から。

独活の大木

からだが大きいだけで、能力も体力もなく、役に立たない人をあざけって言う言葉。

【説】独活は茎が長くのびるが、柔らかくて弱い。大きくなっても役に立たないことから。

鵜の目鷹の目

鵜や鷹が鋭い目つきで獲物を狙うように、真剣で、注意深く、熱心に物事を探る目つきのこと。

馬の耳に念仏

ありがたい念仏を馬に聞かせてもむだなように、いくら意見や忠告をしても、聞き入れようとしないこと。

【類】馬耳東風（ばじとうふう）

海千山千

経験豊富でぬかりがなく、一筋縄ではいかないこと。

【説】海に千年、山に千年棲（す）んだ蛇は竜になるという言い伝えから。

梅に鶯

取り合わせのよいもの、似合っていてさまになるもののたとえ。

【類】松に鶴／竹に虎／紅葉に鹿／牡丹に蝶／波に千鳥／柳に燕

埋もれ木に花が咲く

土の中に埋もれていた木から花が咲くように、世間から忘れさられていた不遇の人が脚光を浴び、世に出ることのたとえ。

【類】老い木に花咲く／枯れ木に花

烏有に帰す

火事で丸焼けになりすべて失うこと。

【説】「烏有」は「烏（いずく）んぞ有らんや」と読み、何もないこと。

【類】灰燼（かいじん）に帰す

恨み骨髄に徹す

骨の髄まで、相手を激しく恨むこと。

【出】史記

売り言葉に買い言葉

相手からの暴言に対抗して、こちらも負けずに言い返すこと。

【説】けんかを売る言葉には、けんかを買う言葉で応じるという意味。

噂をすれば影が差す

人の噂をしていて、その噂の当人が偶然その場に現れること。「噂をすれば影」とも言う。

え

易者、身の上知らず

人の身の上についてはあれこれと言えるが、いざ、自分のこととなると正しい判断ができないことのたとえ。

【類】人相見の我が身知らず

枝を伐って根を枯らす

物事の処理はまず、手近なこと、簡単なことから始めて、徐々に根本的な部分を始末したほうがよいということのたとえ。

【説】木を枯らすためにはいきなり根に手をいれず、まず、細い枝を切り落としてから、根を枯らしたほうがよいという意味。

得手に帆を揚げる

追い風に帆を揚げるように、自分の得意な分野で絶好の機会が到来し、ここぞとばかりに勇み立つ様子。

【類】追風（おいて）に帆を揚げる

江戸っ子は宵越しの銭は使わぬ

その日のお金はその日のうちに使ってしまうのを粋とした、江戸っ子の気っぷのよさ、金離れのよさを言う言葉。

【説】「宵越しの銭」は一夜持ち越す金のこと。「江戸っ子は宵越しの銭は持たぬ」とも言う。

絵に描いた餅

絵に描いた餅は、どんなにうまそうでも食べられない。想像やもくろみ、話だけでは、現実的ではなく、役に立たないことのたとえ。

【説】「画餅（がべい）」とも言う。

柄のない所に柄をすげる

むりやり理屈をこじつけた屁理屈のこと。

【説】柄のいらないものにも、むりやり柄を付けること。

蝦で鯛を釣る

海老のような小さなもの、わずかな元手で、鯛のような立派なもの、大きな利益を得ること。

【説】略して「えびたい」とも言う。

鴛鴦の契り（えんおうのちぎり）

仲むつまじい夫婦のこと。

【説】「鴛鴦」はおしどりのこと。いつも雌雄が寄り添っていることから。

縁の下の力持ち（えんのしたのちからもち）

あえて人目につかない所で、他人のために骨を折ること。また、表舞台で活躍している人を陰で支える人のこと。

縁は異なもの、味なもの（えんはいなもの、あじなもの）

男女の縁、結びつきは、常識や理屈では予想できない不思議なもの、興味深いものだということ。

遠慮なければ近憂あり（えんりょなければきんゆうあり）

先々を見越した深い考えがないと、身近にいろいろと心配事がでてくるというたとえ。

【説】「遠慮」は先々のことを思慮すること、「近憂」は身近な憂い事。

【出】論語

お

老い木は曲がらぬ（おいきはまがらぬ）

年をとってから考え方や性癖を改めようとしてもむずかしいということ。また、老人の頑固なことのたとえ。

【説】老木は弾力性に乏しくて曲がりにくい。無理に曲げれば折れてしまうことから。

【類】矯（た）めるなら若木のうち

老いたる馬は道を忘れず（おいたるうまはみちをわすれず）

経験が豊かでその方面の判断が適切であることのたとえ。

【説】老馬はこれまでに歩いた道をよく知っていて迷わないの意から。

【類】亀の甲より年の劫（こう）

追風に帆を揚げる（おいてほあ）

良い条件に恵まれ、物事が順調に進んだり、力を存分に発揮したりするたとえ。

【説】「追風」は順風の意。順風に帆を揚げれば、船はよく進むことから。

【類】得手（えて）に帆を揚げる

老いては子に従え（おこしたが）

人は年をとったら我を張らずに、子供のやり方に従ったほうがよいということ。

負うた子より抱いた子（おこだこ）

離れている者よりも身近にいる者を大事にしたり、身近なことを優先したりするのが人情だというたとえ。

【説】背中におぶった子よりも、まず前に抱いている子をどうしても優先してあやしてしまうの意から。「負う子より抱く子」とも言う。

大風が吹けば桶屋が喜ぶ（おおかぜふおけやよろこ）

あることが原因となって意外なところに影響を及ぼし、思いがけない結果を招くたとえ。

【説】大風が吹くと砂ぼこりが目に入り、目を病んで目の不自由な人が増える。目の不自由な人の多くは三味線をひくので、三味線に使う猫の皮がたくさん必要になり、多くの猫が捕らえられる。猫が少なくなると鼠（ねずみ）が増え、鼠は桶をかじるので、桶が売れて桶屋が繁盛して喜ぶという話から。「風が吹けば桶屋が儲かる」とも言う。

陸に上がった河童（おかあかっぱ）

得意の技や能力を発揮する場を失って、手も足も出

ない状態になるたとえ。

【説】水中では自由に動ける河童も陸地に上がってはどうしようもないことから。

岡目八目（おかめはちもく）

なにかをしている本人よりも、それをはたで見ている者のほうが冷静に観察できるので、事の善し悪しがよく見え、正確な判断ができるというたとえ。

【説】「岡目」は「傍目」とも書き、他人のしていることをはたから見ること。囲碁をわきで見ている人は、対局者よりも八目先の手まで見通すことができるの意から。

起きて半畳（はんじょう）、寝て一畳（いちじょう）

必要以上の富を望んで、あくせくしてもつまらないということ。

【説】どんなに立派なお屋敷に住んでいても、人一人が占めるスペースは、起きている時は半畳、寝ている時は一畳あれば済むということ。

【類】千畳敷に寝ても畳一枚

奥歯（おくば）に物（もの）が挟（はさ）まったよう

心に思っていることを相手にはっきり言わないため、なにか隠しているようで、思わせぶりな言い方をするさま。

教（おし）うるは学（まな）ぶの半（なか）ば

人にものを教えることは、自分でも勉強しなくてはならないから、半分は自分の勉強になるということ。また、教えることによって自分の学問も進歩する。

【出】書経

恐（おそ）れ入谷（いりや）の鬼子母神（きしぼじん）

「恐れ入りました」をしゃれて言う言葉。

【説】鬼子母神は、狂暴で他人の子供を食べてしまう悪い女神だったが、仏に帰依（きえ）し、出産・育児の神となった。その鬼子母神を祭る寺のある、現在の東京都台

東区入谷と「恐れ入りやした」の「入りや」をかけて言ったもの。

落つれば同じ谷川の水

人はさまざまな人生を生きても、いつかはみんな死に、同じように土に返ってしまうということ。スタートや道は違っていても、行き着くところは同じだというたとえ。

【説】雨やあられや雪などが違う形で降ってきても、谷川へ落ち込めばみな同じ谷川の水になってしまうの意から。

男心と秋の空

秋の天候が変わりやすいように、男の女に対する情が移ろいやすいことのたとえ。

【対】女心と秋の空

男は敷居を跨げば七人の敵あり

男が世の中に出たら、そこは戦場と同様で多くの敵・競争相手がいつもまわりにいると心得ておけということ。

【説】男がいったん外に出れば、七人の敵がすでに待ち構えているの意から。

男は度胸、女は愛嬌

男に大切なものはものに動じない度胸であり、女に大切なのはかわいらしい魅力であるということ。

【説】「度胸」と「愛嬌」の「きょう」の語呂合わせで、この後に「坊主はお経」と続けても言う。

男鰥に蛆がわき、女寡に花が咲く

一人暮らしの男性の生活が不潔になりがちなことに対し、女性は一人暮らしをしていても小ぎれいな生活をするため、男たちからも注目され華やかであるということ。

【説】妻を亡くした男は世話をしてくれる人がいなくなって、身のまわりや家が汚くなる。夫を亡くした女は、自

分のことに時間をかけられるようになって身ぎれいになり、男たちにももてはやされ、花が咲いたように華やかになるということ。

鬼に金棒（おにかなぼう）

ただでさえ強い上に、さらに強力なものが加わることのたとえ。

【説】強く恐ろしい鬼に、金棒というさらに強力な武器を持たせるの意から。

鬼の居ぬ間の洗濯（おにのいぬまのせんたく）

上役や主人など怖い人や気詰まりな人がいない間に、息抜きしくつろぐこと。

【説】「洗濯」は気晴らしの意。

鬼の霍乱（おにかくらん）

ふだんは丈夫で病気などしたことのない人が、思いがけなく病気にかかることのたとえ。

【説】「霍乱」とは日射病や暑気あたり、古くは急性胃腸病の意。頑健な鬼が日射病や暑気あたりなどで患うの意から。

鬼の念仏（おにのねんぶつ）

無慈悲で残忍な心を持った者がうわべだけ、慈悲深げな態度をしたりやさしい言葉を言ったりすることのたとえ。また、柄にもなくおとなしそうに殊勝らしくふるまうことを冷やかして言う。

【説】恐ろしい鬼が念仏を唱えることから。

【類】鬼の空（そら）念仏／鬼の空（そら）涙

鬼の目にも涙（おにのめにもなみだ）

ふだんは鬼のように厳しい人でも、たまには情に感じてやさしい態度をとり、目に涙を浮かべることもあるというたとえ。

鬼も十八、番茶も出花（おにじゅうはち、ばんちゃもでばな）

どのような器量の女性でも年頃になれば誰でも娘らしい魅力が出てくるということ。

【説】鬼の娘でも十八という年頃になれば、魅力も出て娘らしくなる。質の劣る番茶でも、いれたての出花はよい香りがするの意から。

斧を掲げて淵に入る

物にはそれ相応の用途があるのに、見当はずれのふさわしくないことに使うこと。また、適材適所でないことを言う。

【説】水中で斧は役に立たないのに、斧を振りかざして淵に入っていくの意から。

【出】淮南子

帯に短し、襷に長し

中途半端で使いものにならない物事のたとえ。

【説】帯にするには短すぎ、襷にするには長すぎて、結局は使えないの意から。

溺れる者は藁をも掴む

困りきっている者は、助かりたい一心で全く頼りにならないものにさえしがみついて、救いを求めてあがくということ。

【説】溺れかけている者は、水に浮かんでいる藁のような役に立たないものでもつかんで助かろうとするの意から。

お前百までわしゃ九十九まで

ともに元気に長生きして仲睦まじく暮らしていこうという夫婦の願いをうたったもの。

【説】「お前」は夫、「わしゃ」は妻のことで、この後に「共に白髪（しらが）の生えるまで」と続く。

思い内にあれば色外に現る

心の中で思っていることは、自然と顔色や言動に出るということ。

【説】「心内にあれば色外に出る」とも言う。

【出】大学

思い立ったが吉日

あることをしようと思い立ったら、日を選ばずにすぐに取りかかったほうがよいということ。

【説】「吉日」は暦で縁起が良いとされる日。何かしようと一念発起したら、日の良し悪しは関係なくすぐに実行せよ。その日が吉日なのだという意から。

思い、半ばに過ぐ

考えてみると思い当たるふしが半分近くあり、十分に推察できるということ。

【説】思い当たることが全体の半分以上あるの意から。

【出】易経

思うに別れて思わぬに添う

恋しい人とは結ばれず、思ってもいなかった相手と結婚する。男女の仲は思いどおりにはいかないことを言う。縁とは不思議なものだということ。

【類】思うに添わで、思わぬに添う

思う念力、岩をも通す

心を込めて物事に取り組めば、どんなことでも必ず成し遂げられるということ。

【説】「念力」はある事を念ずる精神力の意で、「石に立つ矢」の故事から。「一念岩をも徹す」とも言う。

親思う心にまさる親心

子供が親を思う心よりも、親が子供を思う心のほうがいっそう深いということ。

【説】吉田松陰の辞世の歌「親思ふこころにまさる親心けふ（今日）のおとづれ何ときくらん」から。

親子の仲でも金銭は他人

血を分けた親と子の間でも、金銭に関しては他人と同様、けじめをつけなければならないという戒め。

また、親子の間でも金銭に関しては他人のように水くさいものになるということ。

親子は一世、夫婦は二世、主従は三世

親子の関係はこの世だけに限られるものであり、夫婦の間は前世と現世、または現世と来世の二世にわたり、主従の関係は前世・現世・来世の三世にまたがるほど深いということ。

親の意見と冷や酒は後で利く

親の意見は言われた時はさほど重要に感じられなくても、後々になってからなるほどと思い当たる点が多くあるということ。

【説】冷や酒がしばらくたってからききだすように、親の意見も後になってじっくりきいてくるの意から。

親の十七、子は知らぬ

親がどれほど立派でも、未熟だった頃の失敗などは本人が語らないので子供は知りようもない。説教したり、偉そうにしたりしている親を皮肉っていう時の言葉。

【類】姑（しゅうとめ）の十七見た者がない

親の光は七光

本人にそれほどの実力や才能がなくても、親の社会的地位のおかげで、いろいろと恩恵を受け、得をすることのたとえ。

【説】「親の七光」とも言う。

親はなくとも子は育つ

親がいなくても子供は自分の力や他人の善意などでなんとか成長していくということ。

お山の大将俺一人

小さな世界の中で「俺が一番偉い」と得意げにいばったりする様子。

【説】砂や土を盛った小山の頂上に競争して登り「お山の大将俺一人」と言って、互いに他の者を突き落とす子供の遊びから生まれた言葉。

泳ぎ上手は川で死ぬ

自分の得意なことでもあまり過信しすぎると、逆にわざわいを招き身を滅ぼすことになるというたとえ。

【説】水泳の上手な人でも、川で死ぬことがあるの意から。

【類】川立ちは川で果てる

及ばぬ鯉の滝登り

いくらがんばってみても自分の能力が及ばず、とうてい目的を達成できないことのたとえ。

【説】「鯉」に「恋」をかけて、叶わぬ恋について使う場合も多い。

終わりよければすべてよし

物事は最後の仕上げがすべて。結末が評価の分岐点であるということ。どんなに始まりや途中の経過がよくても、締めくくりが悪ければすべてだめになってしまう。

尾を振る犬は叩かれず

尾を振ってなついてくる犬は叩（たた）かれない。人の言うことに素直に従う人や、愛想よくふるまう人は、誰からもひどい扱いを受けないというたとえ。

【類】杖の下に回る犬は打たれぬ

女心と秋の空

秋の空模様が変わりやすいように、女の心は変わりやすいということ。

【類】女の心は猫の目【対】男心と秋の空

女三人寄れば姦しい

女が三人も集まれば、うるさいくらいにぎやかになるということ。

【説】「女」の字を三つ合わせると、かしましい意の「姦」という字になるところから。

恩を仇で返す

人から親切にされたのに感謝するどころか、こともあろうに傷つけるような仕打ちをすること。

【説】略して「恩を仇」とも言う。

【反】仇を恩で報ずる

か

飼い犬に手を噛まれる

日頃から大事に面倒を見てきた者や信用していた者に裏切られるたとえ。「飼い犬に手を食われる」とも言う。

【類】恩を仇で返す

快刀、乱麻を断つ

どうにもならない込み入った問題などを鮮やかに処理し、解決するたとえ。

【説】「快刀」はよく切れる刀。「乱麻」はもつれた麻糸。もつれた麻糸を切れ味のよい刀でスパッと断ち切るの意から。略して「快刀乱麻」とも言う。

隗より始めよ

大きな事業を始めようとする時には、まず手近なことから手をつけるのがよい、ということ。また、何事も言い出した人から実行すべきであるの意にも用いられる。

【説】中国・戦国時代、燕（えん）の昭王が国の再興のために人材を集める方法を、郭隗（かくかい）という人物に尋ねたところ、「まず、この私を優遇してみてください。そうすれば、隗のような人物でも重く用いるとなれば、

私以上の優秀な人材が伝え聞いて、たくさん集まってくるでしょう」と答えた故事から。「まず隗より始めよ」と、「まず」をつけても言う。

【出】戦国策

蛙の面に水

どんなことをされても、平気でいることのたとえ。

【説】蛙は顔に水をかけられても平気なことから。「蛙の面に小便」とも言う。

【類】馬の耳に念仏

蝸牛、角上の争い

きわめて狭い世界での争い、つまらない小さなことで争うことのたとえ。

【説】「蝸牛」はかたつむり。蝸牛の左の角に国を持つ触氏と、右の角に国を持つ蛮氏とが、あるとき領地を争ったという寓話から。「蝸角の争い」とも言う。

【出】荘子（そうじ）

駆け馬に鞭

勢いづいているものにさらに力を加えて、よりいっそう勢いづかせることのたとえ。

【説】走っている馬に鞭を打って、さらに速く走らせるという意から。

【類】火に油を注ぐ

影の形に随うが如し

影が付いているように、いつも一緒で離れない様子。

【説】影が常に付き従うことから。「影の形に付き添うが如し」とも言う。

【類】形影相伴う

火事の後の釘拾い

大損や大きな浪費をした後で、小さな節約をしても、なんの足しにもならないことのたとえ。

【説】火事で大事な家や家具を焼失してしまった後で、残

った焼け釘を拾ってみてもなんにもならない。

火事のあとの火の用心

火事を出してしまってから、火の用心をしてもなんにもならない。何事も時機に間に合わなければ役に立たないから、前もって用心や準備をせよということ。

【類】葬礼帰りの医者話【反】暮れぬ先の提灯（ちょうちん）

貸したものは忘れぬが、借りたものは忘れる

人に貸したものは忘れないが、自分が人から借りたものは忘れやすい。人間は身勝手なものだというたとえ。

数をいうまい羽織の紐

おしゃべりは慎んだほうがよいという戒め。

【説】「数を言うまい羽織の紐よ、固く結んで胸に置く」という俗謡から。

稼ぐに追いつく貧乏なし

仕事に精を出してよく働けば、貧乏で困るようなことはないというたとえ。

【説】一生懸命に働いて稼いでいれば、貧乏神が追いかけてきても、追いつかれることはないの意から。

風邪は万病のもと

風邪をひくと抵抗力が弱まり、様々な病気になりやすい。たかが風邪ぐらいと軽視するなという戒め。

【説】「風邪は百病のもと」とも言う。

堅い木は折れる

ふだんは強情な人がなにかの問題にぶつかって、意外にもろく、くじけやすい面を見せたり、日頃頑健な人が急に大病にかかって倒れたりすることのたとえ。

【説】柔軟性のない堅い木は、大風でも吹けばポキンと折

れやすいことから。

【反】柳に雪折れなし／柔よく剛を制す

火中の栗を拾う

他人の利益のために、敢えて危険を冒すことのたとえ。

【説】猿におだてられた猫が、炉の中で焼けている栗を拾おうとして大やけどをするという『イソップ物語』の寓話から。

渇しても盗泉の水を飲まず

どんなに苦しく、困っていても、断じて不正は行わないというたとえ。

【説】「盗泉」は中国にある泉の名。孔子はのどが渇いても「盗」という名を嫌がってその泉の水を飲まなかったという故事から。

【出】陸機（りくき）【類】鷹は餓えても穂を摘まず／武士は食わねど高楊枝

勝って兜の緒を締めよ

戦いに勝っても、油断をするなという戒め。事が思いどおりに運んでも安心せず、用心を怠るなということ。

【説】戦いに勝利しホッと一息ついて兜を脱いだ時に、不意に敵に襲われることもあるから、兜の緒を締めなおして油断をするなの意から。

河童の川流れ

その道に精通している人でも、たまには失敗することがあるというたとえ。

【説】泳ぎの上手な河童でも、時には水の勢いに流されることがあるの意から。

【類】猿も木から落ちる／弘法にも筆の誤り

蟹は甲羅に似せて穴を掘る

人は自分の身分や力量などに見合った考え方や行動をするというたとえ。

【説】蟹は大小さまざまな大きさがいるが、各々自分の甲羅に合った大きさの穴を掘って住まいにすることから。

金の貸し借り不和の基

金銭の貸し借りは、その返済をめぐってもめごとが起こりやすく、親しい者同士でも仲たがいの原因となるということ。

金の切れ目が縁の切れ目

金のあるうちは親しくしていても、金がなくなると誰も相手にしてくれなくなる。金がなくなった時が人間関係の縁の切れる時であるということ。

【類】愛想づかしは金から起きる

金の草鞋で捜す

めったに手に入らないものを辛抱強く捜し回ることのたとえ。

【説】鉄製の草鞋はどんなに歩き回ってもすり切れないことから。「金の草鞋で尋ねる」とも言う。

金は天下の回り物

金銭はいつまでも同じ所にとどまっているわけでなく、次から次へと世の中を渡っていくもの。いつかは自分のところにも回ってくるはずだから、今貧しくても、くよくよするなということ。

【説】「金は天下の回り持ち」とも言う。

禍福は糾える縄の如し

人の世の幸福・不幸は互いにより合わせた縄のように転変するということ。

【説】「禍福」は禍（わざわい）と幸福、「糾える」はより合わせるの意。禍福はより合わせた縄のようだという意。

【出】史記【類】塞翁（さいおう）が馬／沈む瀬あれば浮かぶ瀬あり

株を守りて兎を待つ

古いしきたりややり方にこだわって、融通のきかないことのたとえ。また、一度味をしめたことをもう一度望む甘い考えにもたとえられる。

【説】昔中国・宋の農民が切り株に兎がぶつかって死んだのを拾って以来、また、同じように兎が手に入らないかと、仕事もしないで毎日切り株を見守っていたという故事から。「株（くいぜ）を守りて兎を待つ」「株（くいぜ）を守る」「守株（しゅしゅ）」とも言う。

【出】韓非子（かんぴし）

壁に耳あり障子に目あり（かべみみしょうじめ）

秘密の話は他に漏れやすいことのたとえ。また、秘密はとかく漏れやすいから注意せよという戒め。

【説】密かに話しているつもりでも、耳を壁につけて聞いている者がいるかもしれないし、障子に穴をあけて覗いている者がいるかもしれないの意から。「壁に耳障子に目」「壁に耳」「障子に目」などとも言う。

果報は寝て待て（かほうねま）

幸運は求めようとして得られるものではない。人事を尽くした後は、気長に運の向いてくるのを待つほうがよいということ。

【説】「果報」は前世の行為の結果として現世で受ける報いの意で、本来は善悪いずれの報いをも意味したが、しだいに、果報＝幸運を指すようになった。

【類】待てば海路の日和あり

鴨が葱を背負って来る（かもねぎしょく）

都合のよいことが重なって、ますます都合よくなることのたとえ。

【説】鴨鍋に必要な鴨が、葱まで背負ってやってくるの意から。多く、お人好しが人に利益を与える材料を揃えてやってくることを言う。略して「鴨葱」とも言う。

烏の行水（からすぎょうずい）

入浴時間がきわめて短く、よく洗いもせずにさっさと出てしまうことのたとえ。

【説】烏の短い水浴びの様子から。

画竜点睛を欠く

最後の仕上げが不十分だったために、全体的に不完全になってしまったり、引き立たなかったりするたとえ。

【説】「画竜点睛」は「竜を画（えが）いて睛（ひとみ）を点（てん）ず」とも読む。絵の名人が竜の絵を描き、最後に瞳を入れたら竜が天に昇ったという故事から、大事な仕上げを意味する。その仕上げを欠いてしまうこと。

借りる時の地蔵顔、返す時の閻魔顔

借金する時は相手の機嫌を取ろうと穏やかな顔をするが、返済時には不機嫌な顔をするというたとえ。

【説】「地蔵顔」は地蔵菩薩（ぼさつ）に似たやさしい顔。「閻魔顔」は閻魔大王のような恐ろしい顔。「借りる時の地蔵顔済（な）す時の閻魔顔」とも言う。

枯れ木も山の賑わい

あまり役に立たないものでも、ないよりはあったほうがよいということのたとえ。

【説】枯れ木でもいくらかは山に趣を添えるの意。本人がへりくだって言う場合に用いる。

彼を知り己を知れば百 戦殆うからず

相手側と自分側の実力や情勢を十分把握した上で戦えば、たとえ百回戦っても敵に負けることはないの意。

【説】「殆うからず」は危くないの意。相手と自分の長所・短所を知り尽くしておけば決して失敗しないということ。

【出】孫子

かわいい子には旅をさせよ

子供はついかわいがり甘やかしがちになるが、子供

の将来を思うなら、世間に出してつらさや苦しさを体験させたほうがよいということ。

【説】昔は今以上に親元を離れて遠方に働きに出るのもつらいことだったし、単なる旅行にしても、交通が不便で苦しいものだった。「旅は憂（う）いものつらいもの」というのが昔の通念だった。

【類】獅子（しし）の子落し

かわいさ余って憎さが百倍

かわいいと思っていた者でも、いったん憎いと思うようになると、その憎しみは何倍にも激しくなるということ。

勘定合って銭足らず

理論と現実とが一致しないことのたとえ。また、計算上では利益があるのに、実際では損をすることのたとえ。

【説】帳簿や計算の上では収支が合っているのに、手元の現金が不足しているケースがままあることから。

韓信の股くぐり

将来に大きな夢や目的を持っている者は、目の前の様々な苦労や屈辱にじっと我慢しなければならないということ。

【説】中国・漢の韓信という名将は若い頃、町でごろつきからけんかを売られたが、天下に志があったので、恥を忍んで彼らの要求のまま、ごろつきの股の下をくぐったという故事から。

【出】史記

肝胆、相照らす

お互いに心の底まで打ち明けて、深く理解し合うこと。

【説】「肝胆」は肝臓と胆嚢（たんのう）のこと。転じて、心の奥底、真心の意。

艱難、汝を玉にす

人は多くの困難や苦労を経験し、克服していくことによって、はじめて立派な人間に成長するということ。

【説】「艱難」は難儀・苦労、「玉にす」は美しくする、立派にするの意。

堪忍袋の緒が切れる

我慢に我慢を重ねてきたことを抑えきれなくなり、ついに怒りを爆発させることのたとえ。

【説】「堪忍袋」は我慢できる心の広さを袋にたとえた言葉。

看板に偽りなし

看板に掲げてあるとおりの品物を売っていることの意から、表面上のことと、実際が一致していることのたとえ。また、言葉に行動が伴っていること。

管鮑の交わり

お互いに理解・信頼し合い、利害にとらわれない親密な付き合いのたとえ。

【説】管仲（かんちゅう）と鮑叔（ほうしゅく）という二人は、若い時から仲が良く、終生変わることなく交際を続けたという故事から。

【出】列子【類】断金の交わり／刎頸（ふんけい）の交わり／金石の交わり

き

聞いて極楽、見て地獄

話に聞いたものと実際に見たものが、まるっきり違うことのたとえ。

【説】話に聞いたかぎりではまるで極楽のようだと思われたことが、現実に見てみたら地獄のようにひどいありさまだったということから。

【類】聞くと見るとは大違い

既往は咎めず

既に済んでしまったことをいろいろ非難しても仕方がない。それよりも、これから先のことを慎重にせよということ。

【説】「既往」は過ぎ去ってしまったこと。

【出】論語

気が利きすぎて間が抜ける

細部にまでよく注意が行き届くが、かえってこだわりすぎて、肝心なところを見落としているということ。

【説】「気が利いて間が抜ける」とも言う。

危急存亡の秋

危険が目前に迫り、生き残れるか滅びるかの重大な時期。

【説】「秋（とき）」は大切な時期の意。

【出】出師表（すいしのひょう）

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥

知らないことを聞くのは恥ずかしいことだが、それは一時だけのこと。聞かずに知らないでいれば、一生無知として恥をさらすことになる。知らないことは恥ずかしがらずに、積極的に質問したほうがよいということ。

【類】問うは一旦の恥問わぬは末代の恥

聞けば聞き腹

聞かずにいれば知らないでどうにも思わなかったことでも、聞けばむしゃくしゃ腹が立つということ。

樹静かならんと欲すれども風止まず

親孝行をしたいと思っても、もう親がこの世にいなくてできないという嘆き。孝行は親の生きているうちにすべきであるという教え。

【説】揺れている木が静かになろうとしても、風が止まな

いため静かになれないの意から。「風樹（ふうじゅ）の歎（たん）」とも言う。

【出】韓詩外伝【類】石に布団は着せられず／孝行のしたい時分に親はなし

雉も鳴かずば撃たれまい

余計なことを口にすると災いを招くということのたとえ。

【説】雉も鳴かずにいれば人に気づかれず、撃たれることもないのにという意から。

【類】口は禍（わざわい）の門

疑心、暗鬼を生ず

心に疑いを持っていると、たいしたことでもないことまで恐ろしく思ったり、疑わしく感じるということ。

【説】疑いの心があると、暗闇の中にいるはずのない鬼の姿が見えたりするの意から。略して「疑心暗鬼」とも言う。

【出】列子【類】杯中の蛇影（だえい）／落ち武者は薄（すすき）の穂にも怖（お）ず

帰心、矢の如し

家や故郷に、一刻も早く帰りたいと思う気持ちが非常に強い様子のたとえ。

木で鼻をくくる

相談や頼み事を受けた時に、ひどく無愛想な応対をしたり冷淡な態度をとったりする様子。

【説】「くくる」は、こする意の「こくる」が変化した語。鼻をこするにしても、木ではしっくりいかないことから。略して「木で鼻」とも言う。

木に竹を接ぐ

二つのものの性質が違いすぎて調和が取れず、前後の釣り合いがとれないこと。つじつまが合わないことのたとえ。

【説】木に竹を接ぎ木しようとしてもうまくいかないと

う意から。略して「木に竹」とも言う。

木に縁りて魚を求む

手段・方法が間違っていたら、絶対に目的を達成できないというたとえ。また、不可能な望みを持つたとえ。

【説】木に登って魚を獲るという意から。

【出】孟子（もうし）

昨日の綴れ、今日の錦

人生は浮き沈みが激しいもの。人の運命も定まりにくく、変わりやすいということのたとえ。

【説】「綴れ」はぼろ、「錦」は美しい絹の衣装。昨日はぼろを着ていた人が、今日は豪華な着物を身にまとっているの意から。「昨日の錦、今日の綴れ」とも言う。

昨日の友は今日の敵

人の考え方や態度は変わりやすく、当てにならないということのたとえ。

昨日は人の身、今日は我が身

他人のことだと思っていた不幸や災難がいつ自分に降りかかってくるかわからないということ。

木仏、金仏、石仏

融通の利かない人。特に、男女の情愛の機微（きび）がわからない人のたとえ。

九牛の一毛

多くの中のごくわずかな数。取るに足らないこと。

【説】「九牛」は九頭の牛、たくさんの牛のこと。多くの牛の中の一本の毛の意から。

【出】漢書

九死に一生を得る

死を免れない状態、また、とうてい助からないだろうとされる死の瀬戸際から、かろうじて助かること

のたとえ。

【説】助かる見込みは十分の一という命をかろうじて得る意。「九死一生」とも言う。

窮すれば通ず

どうにもならない状態まで行き詰まると、開き直るなどしてなんとか苦境を切り抜ける手段が見つかるということ。

【出】易経

窮鼠、猫をかむ

どんなに弱い者でも追いつめられると死にもの狂いになるから、強い相手でも苦しめることがあるというたとえ。

【説】追いつめられた鼠（ねずみ）が、逆に必死で猫に噛みつく意から。

窮鳥懐に入れば猟師も殺さず

窮地に陥った人が助けを求めてくれば、事情がどうあろうと憐れみ助けるべきだというたとえ。また、困窮しきった時は、敵にでも助けを求めるというたとえ。

【説】「窮鳥」は追いつめられて逃げ場を失った鳥。追いつめられた鳥は猟師のふところにでも飛び込んでくる。鳥を撃つのが仕事の猟師でも殺したりはできないの意から。

兄弟は他人の始まり

兄弟姉妹もそれぞれ家庭を持つと、家中心の生活をするようになるから、たがいの交流が薄まり、やがて他人のようになってしまうということ。

【反】血は水よりも濃い

京に田舎あり

都会の中にも、田舎のような寂しい場所や風習が残っていたりするということ。

【説】京都のいろはがるたの最後の句。

京の着倒れ、大阪の食い倒れ

京都の人は衣装に金を惜しまず、大阪の人は食に金を惜しまない。そのために財産を傾けるのも顧みない人さえあるということ。

器用貧乏人宝

器用な人は人からは重宝がられるが、当人は一つの事に徹することができずに大成しないということ。

【説】「器用貧乏」は器用なゆえにかえって貧乏するの意。「人宝」は他人にとって宝、つまり人に重宝がられる意。「細工貧乏人宝」とも言う。

清水の舞台から飛び降りる

必死の覚悟で決断し、物事を実行するたとえ。

【説】京都の清水寺（きよみずでら）の舞台は、高い崖（がけ）に架けられており、そこから飛び降りたら命の保証はないことから。

義理張るより頬張れ

義理を欠くまいと無理な付き合いをするよりも、自分の利益や暮らしの充実を優先せよということ。

【反】義理と褌（ふんどし）欠かされぬ

麒麟も老いては駑馬に劣る

優れた人物でも年老いて衰えると凡人にさえかなわなくなることのたとえ。

【説】「麒麟」は一日に千里を走るという駿馬。「駑馬」は足ののろい馬。名馬も年をとればつまらぬ馬にも劣るということ。

【出】戦国策【反】腐っても鯛（たい）

義を見てせざるは勇なきなり

人として当然為すべき正しいことと知りながら、実行しないのはその人に勇気がないからであるということ。

【出】論語

槿花一日の栄（きんかいちじつのえい）

人の世の栄華は長続きすることなく、はかないものだというたとえ。

【説】「槿花」はむくげの花。この世の栄華は、朝咲いて夕方にしぼんでしまうむくげの花のようにはかないの意から。「槿花一朝の夢」とも言う。

【出】白居易【類】朝顔の花一時（ひととき）

金石の交わり（きんせきのまじわり）

金属や石のように堅く、変わらない友情で結ばれた交わり。

【説】「金石」は金と石。きわめて堅いことのたとえ。

【出】漢書【類】金蘭（きんらん）の契り／断金の交わり／管鮑（かんぽう）の交わり／刎頸（ふんけい）の交わり

金時の火事見舞い（きんときのかじみまい）

顔が真っ赤になることのたとえ。

【説】「金時」は源頼光の四天王の一人「坂田金時」のことで、幼名を金太郎という。相模（さがみ）の足柄山（あしがらやま）に住む山姥（やまんば）と赤竜との間に生まれた子供で、全身が赤かったという。赤ら顔の金時が火事見舞いに行けば、熱気で顔がいっそう赤くなることから。

釘の裏を返す（くぎのうらをかえす）

間違いのないように念には念を入れること。

【説】打った釘の裏に出た先端を曲げて叩（たた）くと釘が抜けにくくなることから。

愚公、山を移す

忍耐強く努力しつづければ、何事もきっと成し遂げられるということ。

【説】中国の愚公という九十歳になる老人が、自分の家の前にある二つの険しい山が家の出入りに邪魔なので、山を削って他所へ移そうと決意。「自分が死んでも子孫へ引き継いで続ければ、いつか必ずできる」と老いの身ながらも実行し始めた。その熱意に感動した天帝が、山を移してやったという故事から。

【出】列子

臭いものに蓋をする

不正なことや都合の悪いことなどを、人に知られないように一時しのぎの手段を用いて隠すたとえ。

【説】悪臭が外に漏れないよう容器の蓋を閉めるの意から。

腐っても鯛

本当に優れたものは盛りが過ぎても、それなりの値打ちを失わないたとえ。

【説】鯛は日本の魚の王様であるから、少々腐っても鯛は鯛でやはりそれなりの価値はあることから。

【反】麒麟（きりん）も老いては駑馬（どば）に劣る

薬も過ぎれば毒となる

どんなによいことでも度が過ぎれば、害になるというたとえ。

【説】効能のある薬も使いすぎれば、かえって毒になるということから。

【類】過ぎたるは猶（なお）及ばざるが如し

口が動けば手が止む

おしゃべりに夢中になると、自然と仕事の手が止まってしまうということ。

口自慢の仕事下手

口先ばかり達者でうまいことを言うが、仕事のほうはたいしてできないこと。口で言うわりには手のほうが動かないこと。

【類】口叩きの手足らず

口では大阪の城も建つ

言葉だけなら、どんな大きなことでも言えるということ。

口と財布は締めるが得

おしゃべりとむだ遣いは慎めということ。口も財布もきちっと締めておいたほうがなにかと得であることから。

口に蜜あり、腹に剣あり

口ではうまいことを言いながら、心の中では陰険なことを考えているというたとえ。

【説】蜜のように甘い言葉を口にしながら、腹の中には人を殺す剣を持っているの意。中国・唐の玄宗皇帝の宰相・李林甫（りりんぼ）の人柄を評した言葉から。

【出】唐書

口は閉じておけ、目は開けておけ

むだ口はきかず、だまってものをよく見よということ。

【説】自分の意見や感情を抑えて、周囲の状況や問題の在りかをしっかり見ることが大切ということ。

口は禍の門

不用意に言った言葉があとで災いを招く。ものを言う時には気をつけよという戒め。

【説】「門」は「かど」とも読む。

【類】舌は禍の根／病は口より入り禍は口より出ず

口も八丁、手も八丁

しゃべることも、仕事をするのも、人一倍達者であること。

【説】「八丁」は達者、巧みの意。「口八丁手八丁」とも言う。

苦肉の策（くにく の さく）

悩み抜いた末に出した策。苦しまぎれに考え出した策略のこと。

【説】「苦肉」は敵を欺くために自分の肉（身）を苦しめるの意。「苦肉の計」とも言う。

国破れて山河在り（くにやぶ さんが あ）

戦争で国は滅びてしまったが、自然の山や河は昔のままで存在している。

【説】世の中のはかなさと、永遠の変わらない自然とを対比した、杜甫（とほ）の詩「春望」の冒頭の句。

首振り三年、ころ八年（くびふ さんねん はちねん）

尺八の修行を言ったもの。

【説】尺八は首を振りながら吹けるようになるのに三年かかり、ころころとよい音を出すのには八年かかる。何事を成すにも、相応の修練が必要ということ。

蜘蛛の子を散らすよう（くも こ ち）

大勢の者がバラバラに散って逃げるさまのたとえ。

【説】蜘蛛の子の入っている袋を破ると、中からおびただしい数の子供が出てきて、四方八方に散るところから。

雲を霞（くも かすみ）

一目散に逃げ去って、姿をくらますことのたとえ。

暗闇の鉄砲（くらやみ てっぽう）

向こう見ずなことをするたとえ。また、物事を当てずっぽうにすること。

【説】暗闇で目標もなしに鉄砲を撃つことから。やってみても無意味なことのたとえ。

苦しい時の神頼み（くるとき かみだの）

日頃信仰心のない者でも、苦しい時や困った時には神

仏に祈って助けを願うこと。転じて、日頃はあまり付き合いのない人に、困った時だけ頼ろうとすること。

暮れぬ先の提灯

不要なことに準備がよすぎて間が抜けていることのたとえ。

【説】日も暮れないのに提灯に明かりをともして持ち歩く意から。

君子、危うきに近寄らず

教養があり、徳の高い人は、常に自分を慎むものだから、危険なことにははじめから近寄らない。

【出】論語

君子は豹変す

徳の高い立派な人は、自分の過ちに気づけば即座に改めるということ。転じて、人が行動や態度などをがらりと変えることを言う。

【説】「豹変」は、豹の毛皮の黄色と黒の斑点が目立つように、きわめてはっきりと変わること。本来は良いほうに変わる場合を言ったが、今では悪いほうに変わる場合にも使われる。

【出】易経

君子は和して同せず、小人は同じて和せず

優れた人物は人との付き合いを大切にするが、自主性を失うことなく、道に外れるような点まで同調することはない。反対につまらぬ人間は、主体性がないからすぐに他人の意見に同調するものの、利害が合わなくなるとたちまち仲が悪くなるということ。

【出】論語

鶏口となるも牛後となるなかれ

たとえ小さな組織であってもそのトップになるほうが、大きな組織の末端にいるよりもよいということ。

【説】「鶏口」は鶏の口の意で、小さな組織の長のたとえ。「牛後」は牛の尻の意で、巨大な組織につき従って使われる者のたとえ。「鶏口牛後」と略しても言う。

【出】史記

芸術は長く、人生は短し

人間の命は限りがあって短いが、優れた芸術作品は作者の死後も長く残って、人々に影響を及ぼすということ。

【説】古代ギリシャの医師ヒポクラテスの言葉「医術をきわめるには長い年月がかかるが、人の一生は短い」から転じたもの。

兄たり難く、弟たり難し

二者のどちらかが勝り、劣るかの定めがつきにくいこと。優劣をつけるのがむずかしいこと。

【説】一方を上位である兄とすることもむずかしく、一方を下位になる弟とすることもむずかしいの意から。

【出】世説新語【類】伯仲の間

芸は身を助ける

習い覚えた芸や技術があれば、それで身を立てることもできるし、万一の時には生計の助けにもなるということ。

桂馬の高上がり

勢い余って軽はずみな行動をすると、弱いはずの者にやられてしまうこと。また、相応の実力もないのに高い地位につくこと。実力もないのに高い地位について失敗すること。

【説】将棋をさす時に言う言葉で、桂馬は変則的に前の駒を飛び越えて進むことができるが、むやみに進むと身動

きができなくなって、歩（ふ）などの餌食（えじき）になってしまうことから。人は身分不相応の出世などをすると、とかく失敗する恐れがあるということ。

【類】桂馬の高飛び歩の餌食

怪我の功名（けがのこうみょう）

誤ってやったことが思いがけない良い結果につながることのたとえ。また、なにげなくやったことが偶然に好結果をもたらすこと。

【説】「怪我」は過失・失敗の意。失敗が生んだ手柄の意から。「過ちの功名」とも言う。

下戸の建てたる倉もなし（げこたたるくらもなし）

下戸が酒を飲まないからといって、酒代をためて倉を建てたという話は聞いたこともない。酒を飲もうが飲むまいが、財産を残すことと飲酒とは関係ないということ。

【説】「下戸」は酒を飲めない人。上戸（じょうご）（酒飲み）が下戸をばかにして言う言葉で、これに対して下戸の言い返しは「上戸のつぶした倉はある」。

下衆の後事案（げすあとじあん）

身分が卑しく教養のない者は、肝心な時によい考えが浮かばず、事が終わってからようやく考えつくものだということ。

【説】「後事案」は後になって思いつく考えの意。「下衆の後知恵」とも言う。

外面似菩薩、内心如夜叉（げめんじぼさつ ないしんにょやしゃ）

外面はやさしく穏やかに見えるが、内面は意地悪く恐ろしい人のたとえ。

【説】うわべは慈悲深い菩薩に似ているが、心の内は夜叉のようだという意。仏教で女性について言った言葉から。「外面如菩薩内心如夜叉」とも言う。

げらげら笑いのどん腹立て（わらばらたて）

大笑いしたり、ひどく腹を立てたりして、感情の起伏が激しいこと。また、そのような人。

【説】「どん腹立て」の「どん」は腹を立てることを強める接頭語。

螻蛄の水渡り（けら みずわた）

初めのうちは熱心にやるが、途中でやめてしまうこと。

【説】土の中にすむ「螻蛄」は泳げはするが巧みではなく、大きな川などは泳ぎきることができないことから。螻蛄は「おけら」とも読む。

毛を吹いて疵を求む（け ふ きず もと）

人のささいな欠点をむりやりに探し出すこと。また、そうやっているうちにかえって自分の欠点をさらけ出してしてしまうことにも言う。

【説】髪の毛を吹き分けて、隠れている小さな傷を探し求める意から。

【出】韓非子

賢者ひだるし、伊達寒し（けんじゃ だてさむ）

世間並みのことをしない者は辛い目にあうということ。やせ我慢や見栄を張る者の愚かさを笑う言葉。

【説】賢者は営利を求めたり人と妥協したりしないから、いつも貧乏でひもじい思いをしがちであり、粋（いき）を重んじる伊達者は見栄を張って薄着でいるから寒い思いをするの意から。

【類】遠慮ひだるし伊達寒し

犬馬の養い（けんば やしな）

親をただ養うばかりで、尊敬する気持ちのまったくないことのたとえ。

【説】親を養うのに、ただ衣服や食べ物など必要なものを与えるだけで、まるで犬や馬を養うのと同じだという意から。

【出】論語

こ

恋に上下の隔てなし

男女の恋愛には、年齢の差や身分、貧富による分け隔てはない。愛し合う者同士はどのような障害も乗り越えていくものであるということ。

鯉の滝登り

人が立身出世の道を激しい勢いで進むことのたとえ。

【説】俗に、鯉は勢いよく滝を登るといわれる。また、中国・黄河の上流にある竜門という滝を登りきった鯉は竜になるという伝説から。

恋は思案の外

恋というものは常識によって理解し、説明しようとしても説明できないところがある。また、恋には人の理性を失わせる一面を持つ。

光陰、矢の如し

月日の過ぎるのが矢の飛ぶように早いことのたとえ。また、過ぎてしまった歳月は飛び去った矢と同じで、再び戻ってくることはない。

【説】「光」は日、「陰」は月の意。月日が放たれた矢のようにあっという間に過ぎ去るの意から。

【類】歳月人を待たず

後悔、先に立たず

済んでしまったことを悔やんでみても、もう取り返しはつかない。だから、事前に十分に注意し、後悔しないようにせよということ。

好機、逸すべからず

せっかく手にしたよい機会はとり逃がしてはいけない、極力生かすように努めよということ。

孝行のしたい時分に親はなし

親孝行をしたいと思う時には、もう親がこの世にいなくて、親が存命中に孝行をしておくべきだったと悔やみ嘆くということ。

【類】樹（き）静かならんと欲すれども風止まず／石に布団は着せられず

好事、魔多し

良いことやできすぎていることには、往々にして邪魔が入りやすいということ。

後生、畏るべし

若い人は気力もあり、将来への可能性を持っている。一生懸命学問に励んだら、その進歩は畏敬すべきものがあるということ。

【説】「後生」は後輩の意。

【出】論語

郷に入っては郷に従え

ある土地に住むようになったら、その土地の風俗や習慣に従って生活したほうがよい。また、組織や集団に属するようになったら、そのやり方に従うのがよいということ。

【類】人の踊る時は踊れ

効能書きの読めぬ所に効能あり

薬の効能書きがむずかしくて読んでもよくわからないと、それがかえって効き目があるように感じられる。難解なもののほうがありがたがられるということ。

【説】「能書きの読めぬ所に効き目あり」とも言う。

孝は百行の本

親孝行は、あらゆる善行の基本となるものであるということ。

【説】「百行」はすべての善い行いの意。

弘法にも筆の誤り（こうぼうにもふでのあやまり）

その道の達人でも、時には失敗することがあるというたとえ。

【説】書の名人・弘法大師（空海）でも、時には文字を書き誤ることもあるということから。

【類】孔子（くじ）の倒れ／上手の手から水が漏る／猿も木から落ちる

弘法、筆を択ばず（こうぼう、ふでをえらばず）

名人・達人などと呼ばれるような人は、道具の良し悪しなどを問題にしない。仕事の出来不出来は腕前によるのだということ。

【説】書の名人・弘法大師（空海）は、筆の良し悪しを選ばずに常に立派な文字を書いたことから。

蝙蝠も鳥のうち（こうもりもとりのうち）

劣っていても同じ仲間には違いないということ。また、取るに足らないつまらない人物が、優れた者たちの中にいて仲間のような顔をしているたとえ。

【説】蝙蝠は鳥ではないものの、飛ぶということからすれば鳥の仲間だという意から。

紺屋の明後日（こうやのあさって）

約束や期日が当てにならないことのたとえ。

【説】「紺屋」は染物屋。染物屋の仕事は天気に左右されるので、「明後日にはできます」と言って期限を延ばすことが多いの意から。

紺屋の白袴（こうやのしろばかま）

専門家でありながら他人のことで忙しく、自分のためにその専門技術を使う暇がないことのたとえ。また、いつでもできると思っているうちに手つかずで終わることのたとえ。

【説】「紺屋」は染物屋。仕事が忙しくて自分の袴を染める暇がなく、白い袴のままでいることから。

【類】医者の不養生／大工の掘っ立て

故郷へ錦を飾る

地位や名誉、富などを手に入れて、晴れがましい姿で故郷へ帰るたとえ。

【説】美しい高価な着物に身を着飾って故郷へ帰るの意。

【類】衣錦の栄

虎穴に入らずんば虎子を得ず

何事も危険を冒さなければ、目的を達したり、大きな成果を得たりすることはできないというたとえ。

【説】虎の住むほら穴に入らなければ虎の子は得られないの意から。

【出】後漢書

虚仮の一心

愚かな者でも一心に行えば、優れたことができるということ。

【説】「虚仮」は愚か者。「虚仮の一念」とも言う。

虎口を逃れて竜穴に入る

次から次へと災難がやってくるたとえ。

【説】虎の住んでいる穴から逃げ出せたと思ったら、今度は竜の住む穴に入り込んでしまうことの意。

【類】一難去ってまた一難／前門の虎後門の狼

心の鬼が身を責める

良心の呵責（かしゃく）にさいなまれること。

【説】「心の鬼」は良心の呵責の意。

心安いは不和の基

あまり親しすぎると遠慮がなくなって、かえって仲たがいのもとになるということ。

小姑一人は鬼千匹にむかう

嫁の身にとって小姑は、たった一人でも千匹の鬼に

も匹敵するほどやっかいな存在だということ。

【説】「小姑」は配偶者の兄弟姉妹。「むかう」は匹敵するの意。

五十にして四十九年の非を知る

人は人生の終わり近くになって過去を振り返ってみると、自分の生き方は間違いだらけだったと悟る。そうならないよう常に反省を重ねて身を正すべきだという教え。

【説】五十歳になってみて、今まで過ごしてきた四十九年の生活には過ちが多かったことに気づくの意から。

【出】淮南子（えなんじ）

五臓六腑に沁みわたる

五つの内臓と六つのはらわた、転じて、腹の中、体のすみずみすべてにまで沁みとおること。

【説】「五臓」は漢方でいう心臓・肺臓・肝臓・腎臓・脾臓の五つ、「六腑」は胃・胆・大腸・小腸・膀胱・三焦の六つを言う。

胡蝶の夢

物と我との区別を忘れてしまうこと。また、人生が夢のようにはかないことのたとえ。

【説】「胡蝶」は蝶の美称。昔、荘子が蝶になった夢を見たが、目が覚めるともとの自分のままである。自分は夢で蝶になったのか、蝶が夢の中で自分になったのかわからなくなったという故事から。

凝っては思案に余る

あまり物事に熱中しすぎると、かえって冷静な判断が下せなくなり、よい考えも浮かばなくなるということ。

骨肉相食む

親子、兄弟などの肉親同士が激しく争う様子。

【説】「骨肉」は親子や兄弟など最も近い血縁関係にある

者の意。

【類】血で血を洗う

事が延びれば尾鰭が付く

物事は必要以上に長引くと、とかく余計な問題が起こってやりにくくなる。できるだけ早く処理せよということ。

言葉は国の手形

言葉の訛（なまり）によって、その人の出身地がわかるということ。

【説】「国」は出身地・故郷。「手形」は昔、手のひらに墨を塗り紙に押した証明書。言葉の訛はその人の国（出身地）を表す手形だということから。「訛は国の手形」とも言う。

子供の喧嘩に親が出る

子供同士のたわいのない喧嘩に、大人である親がまじめに口出しして、自分の子供に加勢する。当人たちに任せておけばいずれおさまるのに、干渉して事を面倒にすることのたとえ。また、大人げないふるまいや、余計な口出しをするたとえ。

小糠三合あったら婿に行くな

少しでも蓄えがあったら、男たるもの気苦労の多い婿養子には行かずに、独立して生計を立てよということ。

【説】「小糠三合」はわずかな財産の意。「小糠三合あるならば入り婿すな」とも言う。なお「小糠」は「粉糠」とも書く。

子は鎹

鎹が材木をつなぎ止めるのと同じように、子供は夫婦の仲をつなぎとめる存在だということ。

【説】「鎹」は材木の合わせ目をつなぎ止めるコの字形の鉄製の大釘。

子は三界の首枷

親は子供を思う心にとらわれて、一生自由を束縛されてしまうということ。

【説】「三界」は前世・現世・来世の三世。「首枷」は罪人の首にはめて自由を失わせる刑具。子供は三界にわたって、親の自由を奪う首枷のような存在だという意。

独楽の舞い倒れ

自分一人が張り切ってやってみたが、結局は独り相撲のむだなことに終わってしまうたとえ。

【説】くるくる回っている独楽が、エネルギーが尽きるとごろんと倒れてしまうことから。

ごまめの歯軋り

実力のない者がどうにもならない状態にあって、いたずらにくやしがったり、いきりたったりすることのたとえ。また、実力のない者はいくら力んでもむだだということのたとえ。

【説】「ごまめ」は片口鰯を干したもの。小さくて干からびたごまめが歯軋りして憤慨する姿の連想から。

【類】蟷螂（とうろう）の斧

米の飯と天道様はどこへ行っても付いて回る

どこへ行っても日が当たるように、人間、どこへ行ってもどんなことをしても食べていけるということ。

【類】ここばかりに日は照らぬ

米の飯より思し召し

ごちそうしてくれたり、物を頂戴するのもうれしいが、それよりもそれをしてくれたという相手の気持ちのほうがずっとうれしいということ。

【説】「飯」と「召し」をかけて調子よく言ったもの。

転がる石には苔が生えぬ

身体をこまめに動かしてよく働く人が、いつも健康で生き生きしていることのたとえ。また、仕事や住居をたびたび変える人は地位も得られず、金もたまらないというたとえ。

【説】苔やカビが生えるということはいいことではない。怠けているからそうなるという格言。本来はたびたび転職するのはよくないの意のイギリスのことわざ。「転石苔を生ぜず」「転石苔むさず」とも言う。

転ばぬ先の杖

何事も失敗しないように、念には念を入れて用心せよというたとえ。

【説】つまずいて転ばないよう、あらかじめ杖をつくっておくこと。転んでからでは間に合わない。転ぶ前に用心して杖を突けの意から。

転んでもただは起きぬ

たとえ失敗しても、逆にその失敗を利用してなにか利益を得ようとする欲深くて抜け目のない様子のたとえ。また、失敗の中からしっかり益になるものを見つけ出すということ。

子を持って知る親の恩

自分が親になり、子育ての苦労をしてみて初めて親のありがたさや愛情の深さがわかるということ。

さ

塞翁が馬

人生、思いがけないことが幸運を招いたり、不幸に

つながったりするので、誰にも予測はつかないということ。だからやたらに喜んだり、悲しんだりしてもはじまらないということ。

【説】「塞翁」は昔中国で、北辺の国境近くに住んでいた老人のこと。ある時、その老人の馬が逃げてしまったが、まもなくその馬が優れた一頭の馬を連れて戻ってきたので人々が祝福した。ところが、老人の子がその馬に乗って落ち、怪我をしてしまった。だが、その子は怪我をしたおかげで兵役を免れて死なずにすんだという故事から。「人間万事塞翁が馬」とも言う。

【出】淮南子（えなんじ）【類】禍福（かふく）は糾（あざな）える縄の如（ごと）し

細工は流々、仕上げを御覧じろ

ものごとのやり方にはいろいろな流儀がある。だから、やり方についてあれこれ口を出さずに、でき上がった結果を見て批評してほしいということ。

【説】「流々」は流儀や流派によって様々なやり方がある

の意。

歳月、人を待たず

時は人を待っていてはくれず、どんどん過ぎていく。だから、時間を大事にせよということ。

【出】陶淵明（とうえんめい）

【類】光陰矢の如（ごと）し

才子、才に倒れる

才知の優れている人は、自分の才知を過信しすぎて、しくじってしまうことがあるということ。

【類】策士策に溺（おぼ）れる

財布の紐は首に掛けるより心に掛けよ

財布の紐を首に掛けて金を盗まれないように気をつけるより、無駄遣いしないように心掛けるほうが大事だということ。

魚は殿様に焼かせよ、餅は乞食に焼かせよ

何をやらせるにしろ、人には適不適があるから、それにふさわしい人を選ぶべきだというたとえ。

【説】魚を焼くのは、おっとりした人がいいし、餅を焼くのは何度もひっくり返したほうがいいので気ぜわしい人が向いているの意から。

酒屋へ三里、豆腐屋へ二里

生活するのにひどく不便な場所のたとえ。

【説】酒屋へ三里、豆腐屋へ二里もある土地の意から。一里は約四キロ。

先んずれば人を制す

相手より一歩先んじれば、断然有利になって相手を制することができるということ。

【出】史記

【類】先手は万手

桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿

樹木の生育をよくするために枝の一部を切る剪定法（せんていほう）について、桜と梅を例にとって言った言葉。

酒飲み本性違わず

酒に酔っても、人の生来の性質は変わらないということ。

【説】「酒酔いの本性違わず」とも言う。

酒は憂いの玉箒

酒に酔えば、心配事も忘れることができるということ。

【説】「箒」はほうきのこと。心の憂いを払ってくれるほうきのようなものだと酒を賛美する言葉。「酒は憂いを払う玉箒」とも言う。

【類】酒は天の美禄（びろく）／酒は百薬（ひゃくやく）の長（ちょう）

酒は燗、肴は刺身、酌は髱

酒を飲むには燗をほどよくするのがよく、酒の肴には刺身が抜群、酌をしてもらうなら若い女性に限るということ。

【説】「髱」は日本髪の部分の名。転じて若い女性のこと。

酒は三献に限る

酒は適量を飲むのがよく、酔いつぶれるほど飲むなということ。

【説】「三献」は昔、人をもてなす時、酒を三杯勧めることを一献（いっこん）と言い、それを三回繰り返したこと。酒は三献程度がほどよいの意から。

酒は天の美禄

酒のうまさ、酔い心地のすばらしさを賛美する言葉。

【説】酒は天から与えられたありがたい俸禄（ほうろく）の意から。

【類】酒は憂いの玉箒（たまははき）／酒は百薬の長

酒は百薬の長

酒は適量を守って飲めば、どんな薬よりも優れた薬だということ。

【説】単に「百薬の長」とも言う。

【出】漢書

【類】酒は天の美禄／酒は憂いの玉箒（たまははき）

雑魚の魚交じり

身分不相応な場所に取るに足らない者が仲間入りしていること、大物の中に小物が交じっているたとえ。

座して食らえば山も空し

働きもせず遊び暮らしていれば、山のような財産があってもいつか使い果たしてしまうということ。

猿も木から落ちる

すぐれた専門家でも、時には失敗することもあるというたとえ。

【説】木登りが巧みな猿でも、時には誤って木から落ちることがあるの意から。

【類】河童（かっぱ）の川流れ／弘法（こうぼう）にも筆の誤り

去る者は追わず、来る者は拒まず

私を信じられなくて私の元を去ろうとする者を引き止めるようなことはしないし、また、私を信じてやって来る者は誰でも拒まない。去る者来る者いずれも、その人の心に任せて、決して無理強いはしないという度量の広さを示す言葉。

【出】孟子（もうし）

去る者は日々に疎し

親しかった人でも遠く離れてしまうと、日ごとに親しみが薄れて次第に疎遠になる。また、死んでしまった人は月日がたつにつれて忘れていくということ。

【出】文選

触らぬ神に祟りなし

神様とかかわり合わなければ、神様の祟りを受けることがないように、何事も関係を持ちさえしなければ、災いが身に及ぶことはない。余計な手出しや口出しはできるだけ控えたほうがよいということ。

【類】触り三百

三顧の礼

目上の人が、ある人に仕事を引き受けてもらうために、何度も足を運び礼を尽くして頼み込むこと。

【説】「三顧」は三度訪ねる意。中国・蜀（しょく）の劉備（りゅうび）が諸葛孔明（しょかつこうめい）を軍師として迎えるために三度訪ねたという故事から。

【出】出師表（すいしのひょう）

三尺下がって師の影を踏まず

先生につき従って行く時は、先生から三尺（約九十センチ）下がって歩き、先生の影を踏んではならない。弟子が先生を敬う心がけを説いた言葉。

【説】本来は「七尺（しちしゃく）去って師の影を踏まず」と言う。

三十九じゃもの花じゃもの

三十九歳はまだ三十代でこれからが人生の花を咲かせる、盛りの時期だということ。

【説】「四十四十と人言うけれど三十九じゃもの花じゃもの」という俗謡から。

三十六計、逃げるに如かず

計略も様々あるが、不利な状況に追い込まれた時にはさっさと逃げるのが最良の策である。逃げるということも重要な作戦の一つだということ。

【説】兵法三十六種のうち、逃げるという計略に及ぶものはないの意から。「三十六計走るを上計となす」とも言う。

山椒は小粒でもぴりりと辛い

体は小さいが、激しい気性と優れた力量を持ち、決してあなどることのできない存在のたとえ。

【説】山椒の実は小粒ながら、ぴりっとした激しい辛みを持つことから。なお「山椒」は本来「さんしょう」と言う。

三寸の舌に五尺の身を亡ぼす

ちょっとした不用意なおしゃべりのために身を滅ぼしてしまうことがある。だから、うかつにしゃべるのは慎めということ。

【説】わずか三寸（約九センチ）の舌が五尺（約百五十センチ）の体を滅ぼすの意から。

【類】舌は禍（わざわい）の根

三代続けば末代続く

家は三代続けて栄えれば基礎もしっかりしてきて末代まで安泰だということ。

三度目の正直

物事は一度目や二度目はだめでも三度目ともなればうまくいくということ。

三人寄れば文殊の知恵

凡人でも三人集まれば文殊菩薩（もんじゅぼさつ）の知恵のような一人ではとうてい出ない、いい知恵が出るということ。

三年、飛ばず鳴かず

将来に備え、じっと機会の来るのを待っているたとえ。

【説】人を脅かす鳥が、三年間飛びも鳴きもせずにいるの意から。

【出】史記

し

鹿を逐(追)う者は山を見ず

一つのことに夢中になると、他のことを顧みるゆとりがなくなり、周囲の状況・状態がわからないというたとえ。

【説】山で鹿を追い回している者は、山にいながらも山全体のことが目に入らないという意から。「鹿を逐う猟師は山を見ず」とも言う。

【出】虚堂録

鹿を指して馬となす

明らかな間違いや理屈に合わないことを無理に押し

通すこと。

【説】始皇帝の死後、幼い帝の末子を二世皇帝として自ら宰相となった趙高（ちょうこう）が、幼少の皇帝に鹿を「馬です」といって献上した。幼帝は「これは鹿ではないのか」と側近たちに尋ねた。ところが、臣下の多くは趙高の権力を恐れて「馬です」と相づちを打ったという故事から。

【出】史記【類】鷺（さぎ）を烏（からす）と言いくるめる／這っても黒豆

地獄で仏にあったよう

ひどく困っている時などに、思いがけないところから助けが入った時のうれしさを言う。

【説】地獄で慈悲深い仏様にひょっこり会ったようなうれしさの意から。略して「地獄で仏」と言う。

【類】闇夜の提灯（ちょうちん）／干天（かんてん）の慈雨（じう）

獅子身中の虫

内部の者でありながら、内部に害をもたらす者。また、内からわざわいの生じるたとえ。

【説】獅子の体内に寄生して、獅子の恩恵にあずかっていながら害を加えて死に至らしめる虫のことから。仏経語。

【出】梵網経（ぼんもうきょう）

獅子の子落とし

我が子にわざと苦労をさせて、厳しく鍛え育てることのたとえ。

【説】獅子は生まれた子を谷底に突き落とし、生き残った子だけを育てるという俗説から。

【類】かわいい子には旅をさせよ

沈む瀬あれば浮かぶ瀬あり

人生は浮き沈みを繰り返すものであり、今、不幸・不運であっても、次には良いことが待ち受けている

かもしれないから、くよくよするなということ。

【類】塞翁（さいおう）が馬／禍福（かふく）は糾（あざな）える縄の如（ごと）し／明日（あした）は明日の風が吹く

児孫のために美田を買わず

子孫に財産を残せば、仕事もせずに安逸な生活を送ることになり、かえってよくない結果をもたらすから、あえて残さないようにするということ。

【説】子孫のために立派な田地を買わないの意から。西郷隆盛の詩。

親しき仲にも礼儀あり

親しくなると、とかく遠慮がなくなりがちで、それが、不仲の原因になりかねない。だからどんなに親しい仲でも礼儀は大切であるということ。

舌の根の乾かぬうちに

言い終わるか終わらないうちに、ということ。言い終わったすぐ後に、それと反することを言った時に非難して言う言葉。

死中に活を求める

絶望的な状態の中で、なんとか必死に活路を探し求めること。また、切羽詰まった状況を打開するために、危険の中に決死の覚悟で飛び込んでいくこと。

【説】「死中に生を求める」とも言う。

失敗は成功のもと

失敗してもその原因を明らかにして反省し、同じ失敗を繰り返さないように心がければ成功への道が開ける。失敗によって成功が得られるのだから、失敗は成功のもといえるということ。

【説】「失敗は成功の母」とも言う。

疾風に勁草を知る

困難や試練にあった時、はじめてその人の意志の強

さや値打ちがわかるということ。

【説】「疾風」ははやく激しい風、「勁草」は強い草の意。激しい風が吹くと、弱い草はみな折れてしまうから、強い草がそのときはじめて見分けられるの意から。

【出】後漢書

十遍読むより一遍写せ

何度も読むより、一回書き写したほうが書物の内容をよく理解できるということ。

【説】「十読は一写に如（し）かず」とも言う。

死人に口なし

死んでしまった人は、弁解も証言もできないということ。

四百四病の外

恋わずらいのこと。

【説】「四百四病」は人間の病気は四百四あるとされる説。ただし、恋の病だけはそれ以外であるということ。

自慢は知恵の行き止まり

自慢するようになると、向上心が少なくなり、進歩はもう望めないということ。

霜を履んで堅氷至る

物事の現れ方ははじめに小さな兆しがあって、それから徐々に大きくなるというたとえ。災いの兆しが少しでも見えたら、やがては大きな災いがやってくるものと思ったほうがよい。そしてそのための用心や用意を怠るなということ。

【説】霜を踏んで歩くようになると、やがて堅い氷の張る厳しい冬がやってくるの意から。

【出】易経

蛇は寸にして人を呑む

優れた人物は幼い時から、並みの人間とはかけ離れ

た素質や気概を持っているということ。

【説】大蛇（だいじゃ）は一寸（三センチ）ほどの子蛇の頃から、人間を呑み込もうとするほどの気概を持っているの意から。

【類】栴檀（せんだん）は双葉（ふたば）より芳（かんば）し／実（み）のなる木は花から知れる

沙弥から長老にはなれぬ

物事には順序があって、段階をふまなければ上には進めないというたとえ。

【説】新入りの僧（沙弥）は一足飛びに高僧（長老）にはなれないの意から。

【類】生まれながらの長老なし／端（はな）から和尚（おしょう）はない

十年一日の如し

長い間、ずっと同じような状態であること。同じようなやり方で進歩がないこと。また、同じやり方を固持すること。

重箱の隅を楊子でほじくる

取るに足らない細かなことまでしつこく詮索するたとえ。

柔よく剛を制す

弱い者が強い者に勝つというたとえ。

【説】柔軟なものがそのしなやかさを活用して、剛強なものに勝ってしまうということから。

【出】三略【類】柳に雪折れなし／堅い木は折れる

朱に交われば赤くなる

人は環境や付き合う人次第で、良くも悪くもなるというたとえ。

【類】麻の中の蓬（よもぎ）／善悪は友による／水は方円の器に随（したが）う

春宵一刻値千金（しゅんしょういっこくあたいせんきん）

月がおぼろに霞み、花の香りがただよう春の夜は、ほんのわずかな時間が千金にも値するほどすばらしいということ。

【説】「一刻」はわずかな時間、「千金」は千両・大金の意。なお「値」は本来「直」と書く。

【出】蘇軾（そしょく）

春眠、暁を覚えず（しゅんみんあかつきおぼ）

春の夜は短い上に、心地よく眠れるので、夜の明けたことも気づかない。春の朝は容易に起きにくいということ。

【出】孟浩然

小異を捨てて大同につく（しょういすてたいどうにつく）

少々の意見の違いにはこだわらないで、基本的なことが一致していれば大方が支持する意見に従うこと。

【説】「大同」は多くの人がひとつにまとまること。

正直の頭に神宿る（しょうじきこうべかみやどる）

正直な人は神様が見守っていてくれているということ。

【対】正直者が馬鹿を見る

正直は一生の宝（しょうじきいっしょうたから）

正直な人間は人から信頼され、その信頼によって幸福を手にすることができる。正直さこそ、一生の宝のようなものだということ。

上手の手から水が漏る（じょうずてみずもる）

上手な人でもちょっとした油断などから、時には失敗することがあるというたとえ。

【類】弘法（こうぼう）にも筆の誤り／河童（かっぱ）の川流れ／猿も木から落ちる

少年老い易く学成り難し

月日の過ぎ去るのは早いもので、少年もすぐに老人になってしまうが、学問はなかなか成就しないということ。

【説】この後に「一寸の光陰軽んずべからず」と続く。「一寸の光陰」はわずかな時間の意。若いうちからわずかな時間をも大切にして、学問に励まなくてはならないということ。

【出】朱熹（しゅき）

小の虫を殺して大の虫を助ける

やむを得ない場合は、全体を生かすために一部のものを犠牲にすることのたとえ。また、より重要なものを助けるために、それほどでもないものを捨てることのたとえ。

勝負は時の運

勝ち負けは運やはずみに左右されるもので、必ずしも実力どおりに決まるものではないということ。

【説】勝負に負けた人を慰める時などに使われる。「勝敗は時の運」とも言う。

将を射んとせば先ず馬を射よ

目的とするものを手に入れるには、はじめに相手が頼りにしているものに狙いを定めて、それを攻め落とすのが有効だということ。

【説】敵将を討ち取ろうとするなら、まず敵将の乗っている馬を射止めよの意から。「将を射んと欲すれば先ず馬を射よ」とも言う。

小を捨てて大に就く

あまり重要ではないことを捨てて、重要なことのほうに力を注ぐこと。

【類】小の虫を殺して大の虫を助ける

初心、忘るべからず

何事においても、最初の気持ち、謙虚さ、真剣さを忘れてはならないということ。また、最初の目的を忘れるなということ。

【説】物事に慣れ、怠け心を起こしたり、うぬぼれたりすることを戒める世阿弥（ぜあみ）の言葉から。

知らぬ顔の半兵衛

知っていながら、とぼけて知らないふりをすること。また、その人。

【説】「半兵衛」という人名を使って調子よくおどけて言った言葉。「知らぬ顔の半兵衛をきめこむ」とも言う。

知らぬが仏

実状を知れば腹も立つが、知らなければ怒ることもなく、仏のように穏やかにしていられるということ。また、みんなにばかにされているのに、本人のみが知らないで平気でいるさま。

白羽の矢が立つ

大勢の中から特別に選び出されること。

【説】人身御供（ひとみごくう）に選んだ少女の家の屋根に、神が白い羽根のついた矢を立てたという言い伝えから。

吝ん坊の柿の種

けちな人は、どんなつまらないものでも惜しがって手放さないということ。

【説】「吝ん坊」はけちん坊のこと。けちん坊は柿の種でさえ捨てるのを惜しがるという意から。「けちん坊の柿の種」とも言う。

人事を尽くして天命を待つ

できることは最善の努力をもってすべてし尽くした上で、あとは天の命令を待つということ。

【説】「人事」は人間の力でできる事柄。「天命」は天の命

令の意。

【出】初学知要

人生、朝露の如し

人の一生は、朝日を受けてたちまち消えてしまう朝露（あさつゆ）のように、短くはかないものだということ。

【出】漢書

進退、これ谷まる

進むことも退くこともできない困難な状態に追い込まれること。

【説】「谷」は窮（きわ）まるの意。

【出】詩経

死んだ子の年を数える

今さらどうしようもない過去のことについて、愚痴を言ったり、後悔したりすることのたとえ。

【説】今生きていたら何歳になると、数えてみてもはじまらない死んだ子の年齢を数えるの意から。「死児（しじ）の齢（よわい）を数える」とも言う。

死んで花実が咲くものか

人間死んでしまったらすべておしまいである。どんな状況にあっても、生きていればこそ、よいこともあるということ。

【説】死んだ木に花が咲いたり、実がなったりしないの意から。

【類】死ぬ者貧乏

心頭を滅却すれば火もまた涼し

どのような困難に遭おうとも、心の持ち方ひとつで辛さを感じなくなり、乗り越えることができるということ。

【説】「心頭」は心・心中、「滅却」は消し去ること。心の中から雑念を消し去って、無念無想の境地に達すれば、

火さえも涼しく感じられるの意から。武田信玄に仕えた僧・快川（かいせん）が織田勢に攻められ、甲斐（かい）（山梨県）の恵林寺（えりんじ）で焼死した時に唱えたと伝えられる言葉。

辛抱する木に金がなる

忍耐してこつこつ励めば、いつか成功し、財産も持てるようになるというたとえ。

【説】「木」は「気」にかけて言ったもの。

す

粋が身を食う

粋人（すいじん）が遊里で深入りして遊んでいるうちに、ついに身を滅ぼすことを言う。

【説】「粋」は「粋人」、人情の機微に通じた人。特に花柳界の事情に通じている人。「粋は身を食う」とも言う。

【類】芸は身の仇（あだ）

水火を辞せず

どんな苦難も危険もいとわず、力を尽くして事をやり抜く決意のたとえ。

【説】水におぼれ、火に焼かれるような苦痛や困難があろうとも恐れずに行う意から。

水魚の交わり

水と魚の関係のように、切っても切れない関係にある親密な友情・交際のたとえ。

【説】中国・蜀（しょく）の劉備（りゅうび）が、名将・諸葛孔明（しょかつこうめい）との交わりについて「私に孔明が必要なのは、魚が水を必要とするようなものだ」と語った故事から。

【出】蜀志（しょくし）【類】断金の交わり／管鮑（かんぽ